

1 コリント 12 : 3 1 ~ 13 : 7      最高の道      26, 5, 31

1, 先週のペンテコステの礼拝では、使徒 2 章の「五旬祭の日がきて、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話だした」から教会の誕生が語られました。本日の箇所 I コリント 13 章は、パウロの伝道によって誕生したコリントの教会の人々に対して愛を語っているところです。「愛の賛歌」ともよばれています。今年度の教会標語は「イエスさまの愛に触れて変化する」で、II コリント 5 : 14 の「キリストの愛が私たちに駆り立てている」からとられています。パウロは、信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。そして愛を追い求めなさいとまで言っています。そのもとにあるのがイエスさまの愛だと。その愛に触れて私たちは変化し、人に愛を示すことができると。13 章は、12 章と 14 章の間にはさまれた、それだけでも独立しているような箇所ですが、よくよく読むと関係深いことが良くわかります。12 章は教会には多様な賜物が必要なこと、14 章では教会を立てあげるために必要なことが語られています。どちらも愛がなければ実現しないの

です。

2, さて12:31で「あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこでわたしはあなたがたに最高の道を教えます」とあります。最高の賜物でなく、最高の道とされています。愛は賜物の一つではなく、道だと。賜物はこの道、すなわち愛を通らなければ、生かされず、実りを生むことができないということです。ヨハネ手紙Ⅰ、4には「愛は神から出るもので、愛する者は皆神から生まれ神を知っているからです。神は愛だからです。わたしたちが互いに愛し合うならば、神は私たちの内にとどまってくださり、神の愛が私たちの内で全うされているのです」とあります。神の愛が一人一人に、そして教会にとどまるのが大事だと言っているのです。

3, 1コリント13:1節で異言を語ろうとも、愛がなければ騒がしいどら、やかましいシンバルと。14:2で異言とは大きな賜物であるが、神に向かって語っているので、人にはわからないことだと言っています。うるさいだけで、何も伝わらないと。聞いている人、隣人に愛の配慮が欠けているからです。当時のコリント教会では大きな問題だったのでしょう。さらに2節で「預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも愛

がなければ、無に等しい」と言っています。預言や知識も賜物です。預言とは、14：3で人に向かって語るのも、人を造り上げ、励まし、慰めるものだ。教会での説教にあたるものでしょう。あらゆる知識、神秘、完全な信仰を持っていようとも愛がなければ無に等しい。それらの賜物は素晴らしいが、愛という道を通っていなければ実を結ばないと言っているのです。さらに3節では驚くべきことが語られています。「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、何の益もない」と。社会では、自己犠牲を伴う、素晴らしい行為として称賛されるようなことです。素晴らしい愛の行為と見えることの背後に潜む内面の心のありようをえぐりだしているのです。私たちが善意で他人に親切にすることがあります。そのときに、自己満足のため、人に褒められたい、評価されたい、感謝されたいというような気持ちがあってはだめだと。愛をもって神の前にへりくだらなければ、十分ではないと厳しいことを言っているのです。これらのことができるのは素晴らしい賜物だといえますが、愛という道を通るのでなければ賜物は生かされたことにならないと言っているのです。4節以下では、愛は忍耐強い、いらだたず、自慢せず、高ぶらない、自分の利益を求めないと言っているのはそのことです。

4, ヘンリ・ナウエンという神父であり大学の教授でもあり著述家でもある有名な方がいました。この教会でも2年程前まで、彼の多くの本を読む学びをしていました。この方は誠に愛のひとであり霊の人でした。彼はイエスさまにならい、自分の十字架を背負いつつ歩んだ人でした。かれは自分の書いたもの、講演等するたびに、心の奥底では、今日の講演は素晴らしいとか、評価されるだろうというような期待がいつも心の中にひそんでいる。この見返りを期待する心から逃れられない。こういう心から自由にならなければと徹底的に求めつづけた人です。かれは「それらは名声、影響力、支配への関心から出てきたもので、神の国に属していない。変えねばならないのは何よりも自分のこころであり、また変えることができるのは自分の心以外はない。神の愛の懐に絶えず立ち帰りつづけるなら、くよくよと悩む自分をほほえみをもって見守ることができる」と述べています。

5, それでは愛とはなにか？パウロはそれに直接答えることなしに4節から7節で「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義をよろこばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」と言っています。愛は人が行い、その生活の中で

生かすほかに現わしようがないということでしょう。一つ一つのことを実行することは容易ではありません。どうしたらできるのか、ヨハネの手紙Ⅰ、4章にこうあります。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに神の愛が私たちの内に示されました。私たちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに神の愛があります。わたしたちが互いに愛し合うならば、神は私たちの内にとどまってくださり、神の愛が私たちの内で全うされているのです」とあります。パウロも私たちがイエスさまの具体的な十字架の愛の中で生かされているのです。神は愛だから。この愛、すなわち最高の道を通して私たちの賜物は生かされて行くのです。イエスさまの愛がわたしたちを駆り立てているのです。この愛に触れて、謙虚に、へりくだって互いに愛し合うことができるように変化していきましょう。